



# 眠い藁



川崎ゆきお

「今年のクリスマスはどうでした」

「ケーキを食べ損ねた」

「買わなかったのですか」

「買おうとしたけど、あれを一人で食べると体に悪い。しかし縁起物なので、食べたい気はある。嫌いじゃないしね、甘い物は。しかし値段との相性が合わない。高すぎるんだよ」

「クリスマスなんですから、そこは別会計ですよ」

「その別の財布がなくてねえ。それを買くと、年末までの毎日の飯代をかなりケチらないと足りなくなる」

「正月は餅を買われるのでしょ」

「ああ、餅は買う。ご飯の変わりになるから、米を買うのと同じことになるから、これはすんなりと買う。まあ餅は正月にしか食わないけどね」

「お雑煮ですか」

「ああ、味噌汁に入れる」

「僕はスマシがいい」

「お吸い物のように見えるから、そちらのほうが高級そうだねえ」

「そうです。味噌汁では具がよく見えないでしょ。エビとかが入っていても、見えない」

「だから、餅は正月三が日分の雑煮に使う量だけでいい」

「お節料理は」

「ああ、私は棒鱈が好きでねえ。他はいい。あれは保存食だ、魚のね。少し高いが、それは買う。そのかわりお重とかは買わない」

「お節も縁起物でしょ」

「区切りだからね。しかし、年々そういった縁起物から遠ざかっているよ」

「注連縄に蜜柑なんかは」

「ああ、それは実家じゃそんな飾り付けはしていなかったからねえ。習慣がない」

「門松も日の丸の旗もですか」

「そうだねえ」

「何か、特別な理由でも」

「さあ、実家は住宅地でねえ。他から引っ越してきた人達の集まりだ。だから、出身地の習慣によって違うんだ」

「それでお宅は注連縄も門松も旗もなしですか」

「さあ、親の出身地の田舎じゃ、そうだったかもしれないけど、引き継がなかったんだろうねえ」

「その出身地の田舎、つまり両親の実家などへ行ったことがありますか」

「いや、ない」

「それは珍しい」

「何代か前に町に出てきたようで、本家との縁はもう切れていたからねえ。帰っても知らない人ばかりだ。血の繋がりはあるだろうけど」

「じゃ、正月の飾り付けもしないと」

「そうだねえ。近所の家も、今は日の丸は揚げないしね。小旗じゃ駄目だろ。応援じゃあるまいし。しかし注連縄に蜜柑は結構あるねえ。門松はないけど」

「安いですよ。注連縄は表札のところに付ければいいだけです」

「そうだねえ。百均でも売ってそうだし」

「車に付けている人もいるでしょ」

「西洋注連縄を見たことがある」

「ああ、海外でも新年を祝う習慣がありますからねえ。年号が変わるわけですから」

「あれは花輪かな」

「さあ、しっかりと見たことはありませんが」

「造花のようなものかもしれん」

「注連縄も藁じゃないのは安いですよ」

「そうだねえ、藁なんてもう滅多に見ない。藁に高値がついているかもしれんなあ」

「縄も見ないねえ。藁で編んだ。あれは縄跳び用によく米屋へ行ってもらってきたものだ。米俵をくくっていた奴でね。それが米屋の壁にいっぱいぶら下がっていたんだ」

「無料ですか」

「そうだよ。言えばもらえた」

「少し眠くなってきたので」

「え、何かね」

「いえ、話が藁になってから急に眠く」

「藁のように眠るってあるから、それだよ」

「え」

「藁には眠気を催す成分が入っているのかもしれん」

「あ、はい。おやすみなさい」

了